

語り聞くパイロットファーム

開拓者たちが作った酪農郷

第1回

東北大学大学院情報科学研究科准教授 徳川 直人

ならなかった例もあった。その14.4 haが当時の水準としても採算を期待することのできる規模ではなかった。草地酪農主体の計画ではあったが、畑の耕作部門の輪作体

系と組み合わせるといった、根室では現実味に乏しいところがあった。

政策のこうした欠陥がすべて農民の負担となつてのしかかつてき

た。しかし、計画の変更は認められなかった。先導者（パイロット）というより「モルモット」だ、「格子なき牢獄」だとさえ、ささやかれるようになった。窮状を訴

えようにも、それが周囲の目には不平等な手厚い保護だと見えている。入植者たちは語りづらいう状況に追い込まれた。さらに、時代はまもなく近代化（機械化・施設化）と規模拡大へと移り変わり、それに追い立てられなければならなくなつて、そんな初期の歴史は塗りつぶされていった。

今日、かつて「殺人原野」とさえ呼ばれた根釧台地は、日本一の生乳生産基地となつている。

これは、なにより、個々の開拓者・入植者の営々たる努力の産物だ。もちろん、パイロットファームのような政策がなければ不可能だったことも事実であろう。しかし、そこだけを見て政策が成功だったと考えると、まちがうように思う。手探り状況のなかで、政策の不足を補い、あるいはそれに抗い、ときには望んだわけでもない政治にも従事してきた入植者たちの経歴。それなしに今日はありえなかった。

日本一の生乳生産基地。それを誇りとして語る方々も、この先、この方向性をどこまで続けることができるのか、不安を隠さない場合が少なくない。農業を振興させる政策が、農民いじめの側面を持つており、農村いじめですらあったという、矛盾した歴史があるからだ。それはまた、つい土や風から離れた農になってしまうことをも意味していた。パイロットファームがその起点でもあったら、私たちは、その歴史の声を聞く耳を持たねばなるまい。入植者の方々から経験談を直にうかがっているのは、そんな考えからである。

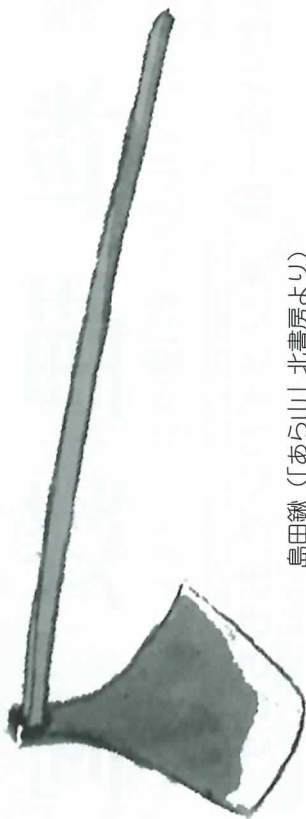
「ここに人がいたんだよ、と子どもに聞かせてもね、おもかげもないから、わからないんです。」「ここは変わりすぎたよ。めまぐるしすぎる。最初の代と比べてもそうだが、俺がやろうと決めて始めた20代の時からしても、変わりました。農業つてのはもつとのんびりできるもんだと思つていたよ。」

—私はいま「パイロットファームの経歴」についていろいろな方から思い出を聞かせていただいている。私などの世代（私は1961年生まれ）は小学校の社会科で習った記憶があるのだが、今はほとんど社会的に忘却されているのに等しいからだ。

日本史上初めての機械開墾だった。「開拓」といえば島田嶽に代表される道具類にせいぜい奮力のみ。草や木の根との壮絶な闘いから始まり、貧困や窮乏の代名詞となり、すこし運が悪ければ種々の「残酷物語」にみまわれる。それが常識だった。ところが、開墾と土壌改良を国が機械でお膳立てしてくれ、耐寒性にすぐれたブロック造りの住宅・畜舎も建設してもらえ、加工に向けた高脂肪の

乳を出す牛まであてがつてくれるという。それで一戸あたりの借金はおよそ250万円。先行投資型の農業の始まりである。その負担は当時としてはケタ違いだったが、描かれる近代的な牧場像もまたケタ違いだった。そう、一般のイメージの中にもある、赤い屋根の牛舎の、牧歌的な、といつてもどこかエキジチックで「近代的な」牧場風景だ。「三段跳び」のような進歩、と言われた。

機械開墾で入植者たちが「肉体的・精神的な開拓の苦役から解放されたのは事実だろう。画期的なこととして記録されてよい。しかし、営農計画は欠陥だらけだった。物価上昇で予算が足りなくなり、住宅は未完成のまま、12月に入居するのに窓が入っていなかった。美原地区では牛舎と住宅が一体化された例すらあった。ジャージー牛が導入され、くじびきで配分されたが、それがひどい法定伝染病（ブルセラ病）を持ち込んだ。播かれた牧草の多くはこの地の風土に根さすものではなかった。入植募集のパンフレットには14.4 haが「可耕地」と書いてあったが、その半分近くが湿地で使いものに



島田嶽（「あら山」北書房より）



パイロットファームの牛舎と住宅（パイロットファーム開拓資料館の展示より）